
mousouman 著
<http://mou-sou.jugem.jp/>

恋と

女の子の話

鳥取時代に好きだった女の子との事を、僕は初恋と呼んでいる。

鳥取に昔住んでいた。幼稚園から小学校一年生までの事だ。

そんな幼い頃の話なので、鳥取の思い出はそんなにないのが正直なところだ。

ただ、そこに好きな女の子がいた。小学校一年生の時の話だ。苗字も名前も平仮名の、今考えるとちょっと珍しい子だ。

ショートカットで凛としていた子だった。

当時、僕はクラスでも非常に優秀なお子様だった（記憶がある）。そしてまた、彼女も優秀なお子様だった。僕等はエリート同士、何か繋がっているのではないかと、幼心に思ったものだ（生意気なガキですね）。

あるとき、僕等は一緒に下校した。どうというつもりもなかったのだろうけど、僕等は手をつないで帰っていた。好きだったのだが、あれは何を意味して手をつないでいたのだろう。今となつては謎だ。

まあ、とにかく手をつないで帰った。すると、学年が少し上の女の知り合いの人に会って、からかわれた。「仲いいねー」みたいな。

僕は、照れたのだ。「こいつが手つなぎたいっていうからつないでるんだ」みたいな事を言ったのを覚えている。言った後、しまったと思ったのも覚えている。でも、その後彼女が何を言ったかは覚えていない。確か、だまっていたのじゃないかと思う。そして、一人ですたすたと先に行ってしまった。

ところで、僕の友人も彼女の事が好きだった。ある日、僕とその友人とでお互いの心の内をさらしたのだ。そしてあるとき、下校する僕等の少し前に彼女が一人で帰っているのが見えた。だから僕等は、一人ずつ彼女の元にかけていき、「あいつがお前の事好きだってよ」と互いの名前を言い合って彼女の元から走り去っていった。

しばらく走って友人と合流し、妙な達成感で少し興奮していたのを覚えている。とにもかくにも、僕達は自分の気持ちを伝えたのだ（人づてだけど）。

だけど結局、その後彼女とばったり道端で顔をあわせて気まずかった。彼女は恥ずかしそうに笑いながら僕を見た。

僕が東京に転校になるのが分かったのはその年の夏だった。実に彼女とは半年も一緒にいなかった事になる。学校から帰って妹からその事を聞かされた時、目の前が回ったのを覚えている。暑い、暑い日だった。

東京に引っ越してから、鳥取の学校のクラスメイトから手紙が来た。その中に彼女のものも入っていた。彼女の手紙にははっきりと、「あなたの事が好きでした」と書かれていた。

僕がずっと鳥取にいてもう少し大人になっていたら、僕は彼女と恋人として付き合ったのだろうか。それは分からない。ただ分かっているのは、所謂両思いというのはこれ位で、こっから僕は怒涛のふられ人生に入っていくという事だ。

童貞考察

僕が童貞を捨てたのは20歳。これはまあ、一般的には普通な範囲なのだろう。もっと早い人だってたくさんいるしもっと遅い人だってたくさんいる。とりたてて特別にどうかという年齢ではない。

童貞って、今となっちゃもうどうでもいい事なような気がする。でも当の本人が童貞だったときはちょっとばかり気になる事だったはずだ。

大学に入学して男友達とか新しく出来始めると、そいつが童貞かどうかちょっと気になったりする。そういう矮小な子でした。僕は。ええ。でも、みんなそうだったろう？童貞捨てたやつは気にならんのだろうけど、童貞だったときはそうなんだよ。

童貞ってのはつまるところ男性の最も潜在的なパワーを秘めている季節の事だと思う。何故かって、そこには膨大な妄想力がうずまいているから。妄想、想像こそが人を動かす。そこには果てしない欲求、ロマンがある。だから人は動くのだ。

みんな童貞捨てる前は過剰な幻想を持ってる。そしていざ初めて女の子とベッドインをした際には意外なほどあっさり終わったりする。最初の一回なんてそんなもんで、二回目三回目以降ようやく気持ちよくなっていく。

でも、この最初の一回がものすごく重要だと思うのです。あの瞬間に、意味もわからずとりあえず腰をまぬけにふっているあの瞬間に、「あれ？うまく動けないな」とか焦っているあの瞬間に、僕等は確実に何かを失う。しかしそれに気づかない。

そして長い夜が明けて朝を迎えて、いっちょまえに世界が変わったような気がしている。でも、変わったのはお前であって、それは成長ともいえるかもしれないけども、でも違う。君は得たのではなく、失ったのだ。

一生童貞でいたいなんていわない。

でも、僕が何かしらエネルギーを失ったのは、童貞を失ったあの夏からなんじゃないかと、思ったりもする。

背中側で着替える少女

僕が高校二年生の時だったと、思う。

学校でソフトボール大会というのがあった。戯れるわけだ。玉とバットで。

で、僕は結構な弱小チームに入った。男は確か僕ともう一人位しかいなかったのじゃないかと思う（僕のクラスは男が少なかったのだ）。

で、あまりにも弱いからみんなちょっと頑張って練習してみよーぜという事になり、朝練なんてやってみる事になったのだ。どこにでもある、高校生の青臭い中途半端な一こまだ。

その日、僕が朝早く登校してクラスに入るとどうも一番だったらしく、教室はもぬけの空だった。僕は手早くジャージに着替えて誰か来るのを待っていた。

すると、何故か地味だが意外にかわいいチームメイトの女の子が来た。あまり話した事はないが、実はちょっと気になっていた子だ。

多少どもりながら会話をちろちろする。白々しい空気がした。相手も緊張しているようだった。季節は夏の少し前だったから、夏服の制服を着ていて、僕は彼女のほんのりとした胸の膨らみを少し見たのを覚えている。チェックのスカートからはみ出した、日本の足の膝小僧を見ながら会話をしていたのを、覚えている。

するとその子が、とんでもない事を言い出した。

「あたし、ジャージに着替えていい？」

「え、ここで？」

「うん」

「じゃ、じゃあ僕、しばらく出てるよ」

「ううん、いいよ、後ろ向いててくれれば」

「…」

と、いうわけで僕はしばらく後ろを向いていて、背中側でその女の子のブラウスのボタンを外す音とか、シャツを脱ぐ音とかを息も絶え絶えで聞いていた。

あの時は律儀に本当に見なかったけど、ちょっと振り返ればその子の着替えている所がすぐそこにあった訳だ。当時はまだ僕は女の子の裸なんか見た事なかったから、凄く、凄く興奮した。

そしてあの「スルスル」という音以外聞こえなかった春先の教室のあの空気だけは、未だに忘れる事が出来ない。

あの子は今どこで何をやっているのだろう。高校卒業後に友達の葬式で泣いている所を見て以来、さっぱり見なくなってしまった。

あるいは僕があの時振り向いていたら、あの子はどんな顔をしたのだろうか。

全ては勿論分からない。

夏に出すと思出す事

夏に出すと思出す事って、あると思う。

けだるくて、暑い夏。社会人になってからは夏休みという概念がなくなってしまったので、とりたてて思出す事はないのだが、学生時代の夏といえば、恋愛だった。

僕が小学校の頃、好きだった女の子と手をつないで下校したのも夏だったし、中学校の頃にデートというものを初めてしたのも夏だった。大学一回生になって女の子と初めて付き合ったのも夏だったし、大学三回生の時には世紀の片思いも経験した。今の奥さんと付き合い始めたのも夏だ。

暑くてけだるくて、全てがあって何も無い夏。そんな夏が、いよいよ始まる。

花火大会に行きました。

今日、横浜の花火大会に行きました。いやー、凄い人だった。花火は、ええ、綺麗でしたよ。

思えば、僕は今まで花火大会ってものに行った事がなかったのです。何でだかは分かりません。多分、ただ機会がなかったから。

花火大会には、そりゃあ多くのカップルがおりました。皆、思い思いに浴衣を着たりなんかしています。みんな、楽しそうにしていました。

僕は今日は奥さんがいるからそうではなかったのだけど、今までの僕であれば、こういう場所って一歩引いたところから見てしまうのが常でした。

多分、花火大会に行かなかった理由の一つでもあるのだと思う。

大学の学園祭の時、花火を見たのを覚えています。あれは確か二回生の時だったな。周りはみんな楽しそうに充実してそうで、きっとカップルの一つや二つできたのでしょうか。僕は花火を、一人で真下で見えておりました。結構綺麗だったのを覚えています。でも、僕はそこでは当事者ではありませんでした。素直に、楽しむ事が出来なかったのです。みんなと一緒に声を上げる事もできませんでした。何故なら、僕は一人だからです。

社会人二年目の時だったかと思いますが、合コンの後にみんなでドンキホーテで買った花火をした事があります。渋谷の、代々木公園で。本当は駄目なんだろうけどね。みんな結構楽しそうに、思い思いに花火を手にとってキャーキャー騒いでました。

僕はそれを、一歩離れた所からタバコを吸いながら眺めていました。つまらなかったわけではありません。中に入る必要を、感じなかったのです。と、いうより、外で見えていたかったのです。

僕はいつだって、当事者意識を持つ事が出来ないまま人生を生きてきました。人から見たら、ノリが悪い男です。クールぶってると思ってる人もいるでしょう。それは、そうなのかもしれません。しかし、僕には、中に入ろうと思わないのです。

何が言いたいわけではないのですが、そんな僕が無意識のうちに花火がより見える場所まで歩いて行って、「おー」とか言いながら見ているのだから、きっと僕も変わったのでしょうかね。ええ。もう僕は、過敏な男の子ではないのでしょうか。

僕が女の子に告白した場所について～十代妄想少年の恋の話～



異性に告白するというのは人生の中でも割とハイライト的な思い出となっている人は多いと思うのだけど、僕にとってもやはりそれはそう。

特に生まれて初めて告白をした時の事は割と鮮明に覚えています。

何故そんな事を急に思い出したかという、今日、人生で初めて告白という事をした場所に偶然立ち寄ったからです。

忘れもしない、高校二年生の秋。京王電鉄の南大沢の駅出口のバスロータリー。

僕は二年生から同じクラスになった女の子に恋をしました。その前の恋が小学生の時だったので、割と深刻な恋煩いになったのは初めての恋だったかもしれません。

ボクシング部だった僕は、減量と毎日の練習で被害妄想の激しい10代の男の子でした。世間は馬鹿ばかりで、特に女という存在は頭の悪い連中で、そんな奴らが満喫している青春なんてものはクソクラエだ、とっていました。

なので、僕達ボクシング部の連中は基本的には女子には嫌われていた訳です。

そんな僕が恋をした瞬間は意外と単純なもので、普段はクールっぽいその子のふとした時に見せた笑顔に、雷が落ちたような衝撃を覚えた訳であります。

さて、下校の途中や友人の家に泊まりで遊びに行った時などに僕は恋の相談をする訳ですが、とにかくにも告白しよう、と決めました。当時仲のよかった友人も同じく恋をしており、「俺も

告白するから一緒に頑張ろうぜ」という、どこにでもありそうな十代少年の堅い約束がきっかけです。

決戦の時は文化祭。僕達のクラスはオズの魔法使いの劇を出し物としてやる事になっていました。そして僕はかかしの役で出演していたのですが、愛しの彼女は舞台裏で出演者の衣装を担当していました。

かかしの役柄である僕は、自分の身長位ある太い棒をちゃんちゃんこの両腕から通し、僕の腕は丁度イエス・キリストの十字架のようになっていた為、一度棒を通すと自分で服装を直したり何かをする事が出来ません。そしてその代わりに僕の衣装を直したりしてくれたのが彼女だった訳であります。

すぐ目の前で大好きなあの子の顔があり、その子が僕の服を色々直したりしてくれている訳です。いやあ、ボーイズビーですねえ。そりゃ告白しようという機運も高まるもんです。

ところが、何せ告白はおろか恋すらまともにしていなかった十代童貞少年の僕ですので、告白をどう切り出していいものか全く分からず、結局文化祭は終わってしまいました。

しかし、チャンスはその夜に待っていました。文化祭の打ち上げのボーリング大会後、電車が一緒になったのです。そして彼女が降りたのが南大沢の駅だった訳であります。

一旦は彼女を電車から見送ったものの、僕はそこで瞬間的に決意をして自分も電車を降り、彼女を追いかけました。



そして駅改札を出たバスロータリーの所で自分の気持ちを伝えたという訳です。

いやあ、甘いですねえ。僕にもそんな時代があったんですねえ。高校二年生ですから、かれこれ14年前ですか。ううむ。時代だ。

告白の結果ですか？思い出というのは都合のよい、美しい部分だけを大切に残しておけばいいものなので、それは特に思い出さない事にします。

タバコ、吸お。

メガネをかけると何故女性はエロく見えるのか

いや、別に何らか考察めいたものがあるわけじゃないんですけど。

解説も答えもないんですけど。

ただまあ、普段メガネをかけてない女性がメガネをかけていたりすると、ドキっとする男性は多い筈。

いや、何故かですね、「エロく」見える訳です。何だかやたら挑発的というか。

「眼鏡かけるとエロいって言われる」

と、女性も自分で言ったりします。だからきっと、僕だけじゃなくて色んな人がそう思うのでしょう。

そして女性の発言によると「先生みたいって言われる」というのもよく聞きます。それも、何だか納得です。

つまり、総じて女性はメガネをかけると「エロくなる」のであり、「先生っぽくなる」訳です。

しかしひょっとしたらこの二つに相関関係が実はあって、「先生」＝「エロ」なのかもしれません。「先生っぽいからエロく」見えるのかもしれないのです。

これには何だか凄く深い意味があるような気がします。男にとって「女教師」という存在は、エロスの対象になる可能性が高いのかもしれない。

僕個人の経験で言えば、経験がある限りの女教師で若くて綺麗な人はいなかったので（失礼！）実感値はありませんが、知り合いで綺麗な子で「教師」だったりすると、やはりヨカラ又妄想がメキメキと湧いてきてしまうのも事実なのであります。

男子にとって、とりわけ、十代の童貞男子にとって、最も身近な年上の女性。それが、女教師。未だ見ぬ性への桃源郷を最も体現している存在が、女教師なのでしょう。

そしてそうした世界観は大人になっても残っているものです。丁度、セーラー服が甘酸っぱい青春の象徴として、大人になっても男の心を捕らえて離さないように、眼鏡というのは十代の頃に垣間見た、大人の女性へのほのかな憧れの象徴なのでしょう。

なーんて事を思ったのですよ。一緒にいたコンタクトの子が眼鏡に変えた所を見た時に。

やっぱり普段眼鏡じゃない子が眼鏡かけると、ううむ、エロいですね。

畳と涙

夏になり、じんわりと暑い日々がやってきた。

節電でクーラーを控えめにしてるから、部屋の中はとにかく暑い。汗がじとじと湧いてくる。

額の汗を感じながら、熱のこもった部屋に一人でいると思い出す事がある。

大学四年の夏。暑かった夏。

自分の人生の中で、ここまで色々あった夏はこれからもそうそうないんじゃないだろうか、という位色々あった。

この夏に、僕は厄介な恋をしていた。

所謂、三角関係だ。

そして頭のどこか大事な部分が暑さで溶け落ちてしまったように、僕は色んな女の子と寝た。

でもとにかく、僕は厄介な恋をしていた。

顛末については割愛するが、僕は京都の一角の自分の部屋に、ちょっとした旅から帰ってきた。確か、夕方になる少し前だったと思う。

扉を開けると、見慣れた光景が出迎えてくれ、密封された熱が僕を包み込んだ。

畳の上に鞆を放り投げ、そのまま横になった。

暑さと、畳の匂いが鼻につく。夏の光が、カーテンの隙間から部屋を覆う。部屋の外から、車が走る音が聞こえる。

そして、一人で泣く。声を出さずに。

そんな事を、思い出す。額の汗を感じると。

先日から、女子高生のとあるオーディションをやっている。

今日の子で最後。大体、合格する子は審査員の中でも決まっていた。まあ、妥当といえば妥当な子を万丈一致で選ぶ予定だった。

で、本日。最後の子がやってきた。メガネをかけた、黒髪の女の子。スラッとしていて、どこことなく線が細い印象を受ける。高校二年生。

一見して、真面目で、地味な子だ。案の定、生徒会長とかをやっていたらしい。話させてみると、まあ可もなく不可もなく喋る。

将来の夢は、アナウンサーという。こういうオーディションを受けにくる子はアナウンサーになってみたいという子が多い。ただ、残念ながらその将来には目を塞いであげたくなるような子がほとんどだ。まあ、夢を見るのは勝手なのだけど。

で、定例のように「どうしてアナウンサーになりたいんですか？」と聞いてみる。

「話すとき長くなるんですけど」

彼女は少しはにかんで一瞬恥ずかしそうにした後、照れくさそうに話し始めた。

「あたし、小さい頃から少年サッカーをやってて。実際に男の子に交じってサッカーしてたんですけど、友達の中で凄く上手な子がいて。小さい頃から抜群で、ユースとかからも声がかかって、みんながその子に期待してて」

こんなか細い子が男の子と一緒にサッカーをしているというのも意外なのだが、彼女の話はまだ続く。

「彼は言うんです。大人になったら世界でプレーする有名な選手になるって」

「だから、あたしはアナウンサーになって、彼が有名になった時に彼の活躍をレポートしたいなって、思ったのがきっかけです」

iiiiiiiiiiii話だあああああ！！！！

もう！青臭くて！すげええキラキラして瑞々しくて！

審査員一同、ため息でちゃったもの！彼女の背景に、入道雲と青空が見えた気がして！
あれだ！校庭の隅の水道の蛇口、がぶ飲みだ！！

「そ、それで、その彼は今どうしてるの！！??」審査員一同、もう前のめり。

詳細は忘れたけど、どっかの遠くのプロチームに入って、頑張ってるそうだ。

「最近は会ってないんですけど、mixiで繋がってやり取りはしていて、今度地元に戻って来た時に会おうねって話してるんです」

ああああああああああ青iiiiiiiiiiii！！！！

これぞ！青春！！！！

好きな人と一緒に、夢見て何が悪いんだ！それを否定する大人の野郎は何様だ！
好きな人の為に頑張って、何が悪いのさ！！！！

「いや、好きとかじゃないんですけど！」

彼女は言う。

「いや、それはね、恋というんだよ・・・」

僕はベルトの上に乗った腹を静かに揺らしながら、心の中でそう呟いた・・・。

恋愛の思い出について

勿論僕だけの問題ではなく、恋愛というのは多かれ少なかれ、その人にとって特別な経験になりうるものだし、人生の中で幾つかある最も幸せな時間の中の一つにだってなるだろう。

例えその恋愛が結果的に実らないものになってしまったとしても、その一つ一つの瞬間は、信じられない位キラキラした思い出となって僕達の心の中に残っていくものなんだと思う。

いやむしろ果たされなかった思いこそその輝きは増すのだろうし、聞くところによると女の子はそうでもないようだけど、僕のような男子にとってはそのキラメキはいよいよもって人生を決定づけ兼ねない圧倒的なパワーとなってその後も心の中で燃え続ける。

そしてそんな思い出は、どういう訳か前後をすっ飛ばして刹那の瞬間瞬間だけを、やけに鮮明に心の中に焼き付けていくのだ。まるで何かの印のように。

祭りの後の夜のバスロータリー

部活の後の学校の下にあるマクドナルド

雨の中、一人で歩いて帰って歌った歌

見知らぬ街の神社の階段で眠る霊魂

夜の公園で、二人で食べたコンビニのおでん

静かな夜の窓の外から聞こえるカエルの鳴き声

誰もいない、世界の終わりのような冬の川辺

ふとした時に言われた、何かの魔法のような言葉

雪の残る荒野に流れる時代錯誤の民謡

隠れ家のように素敵なカフェで食べるアップルパイ

駅からやけに離れて分かりにくい、まるで繁盛していないお店

語られる事の無い、地下鉄のホームの壁に書かれたような言葉。

それはきっと、何かの予言なのかもしれない。

或いはこれからの人生で二度と巡り会う事のない、そんな一つ一つの思い出の中に、僕の人生の何かが詰まっている。

まあ、それだけの話。

幻と言われる薔薇色のキャンパスライフについて



薔薇色のキャンパスライフはきっとどんな人にとっても桃源郷のような存在であり概念なんだろうと思う。そしてそれは幻と言われるらしい（四畳半神話体系によれば）。

不毛な中学時代と辛い高校時代を終え、絶望の浪人時代に突入した僕にとって、キャンパスライフ程甘美な響きを持つ世界観はなかった。

実際、僕は第一志望を京都のとある大学と定めており、「入学＝一人暮らし」というプランが推進されていた訳で、僕に取ってのキャンパスライフとはつまり悠々自適な一人暮らし生活だったのだ。まるでカタログに出てくるような、無印良品で買いそろえたような家具に囲まれ、シンプルでスマートな生活。

僕は浪人時代に出会った村上春樹の「ノルウェイの森」を何度も読み、大学生になったらきっと素敵な女の子と恋に落ち、バーでお酒を飲み、行きずりの女の子と寝たりするのだろうか、と悶々としていた。

かくして僕は無事に第一志望の大学に合格し、自分の事を知る人が誰もいない京都という街で大学生活をスタートさせた。

さて。僕のキャンパスライフはどうだったか。

勉学にはまるで励んでおらず、およそ授業という授業を休み、卒論は教授の情けで認定してもらい、まさにギリギリのラインで単位を獲得していたという、絵に描いたようなダメ学生だった。

憧れの一人暮らし生活もひどいものだった。下宿生の友達であるゴキブリ君の来訪は勿論、ユニットバスが故障し、湯船のお湯がトイレから溢れ出てくるという惨劇にも見舞われた。資金不足で電気が止められ、ガスが止められ、水が止められたらいよいよお終いというレベル。ベランダには鳩がたむろし糞だらけ。

入学当初こそ色々なサークルの飲み会に顔を出してみたり専攻が一緒だった色んな人と仲良くどこかに出かけてみたものの、非社交的という生来の特徴は改善されず、結局ごく限られた友人と一緒に過ごすようになった。

まるでオレンジデイズのように男女でどこかに旅行に行ったりする事もなく、サークルは空手だったので男の巣窟。合コンには恵まれず、ゼミでは変人扱いされ、およそ薔薇色とは言いがたいキャンパスライフだったわけだ。

だが、半生のうちでどこかにタイムスリップ出来るとしたならば、僕は迷わず大学時代に戻るだろう。それ位、京都で過ごした四年間は素晴らしかった。

正直、何かそんなに充実していた訳ではない。上記の通り、まるでうらやむ所のない四年間だった。

ただ、僕が過ごした六畳の部屋には、全てがあった。
そして僕が過ごした四年間には何もなかった。

夢を抱き、夢に泣き、恋を抱き、恋に泣いた。
何かを目指し、何も手に入れる事が出来なかった。
ただ、結果的には無意味だったとしても、その刹那刹那にはキラキラした眩しい瞬間があった。
そしてそれはもはや手に入れる事が出来ない瞬間だった。そう、それこそが、薔薇色のキャンパスライフの正体ではなかったか。

昨年、大阪出張の折りに京都にちょっと寄ってみた。そして自分が過ごした街を、随分と久々に歩いてみた。実に八年ぶりだ。
幾つかの店は潰れ、幾つかの店は八年前と変わらぬ姿で営業していた。

そして自分が過ごしたアパートに立ち寄ると、そこはモノの見事に更地になっていた。何か新しい建物が建っているとかそういうのではなくて、何もなかった。

うむ。見事すぎる我が青春。跡形もなくなっているとは。



萌え要素とかフェチとかについて

先日のUSTREAMで頼まれてもいないのに勝手にこっそりとブロードキャストしてみたグダグダ座談会でも触れたのですが、まあフェチの話です。

果たして僕達は、女性のどこにググっとくるのか、今風に言うところ「萌える」のか（使い方、間違ってる気もしますが）。

こういうのは本当に千差万別で、結構面白い。どうして人によってあんなに違うんだろうか。

「髪型ですね、僕は」と言った男がいたのですが、「髪を、どうしたいの？」と聞くと「いや、別にどうするとかはないんです」との事。

「じゃあ、どういう髪型がいいの？」と聞くと、「いや、それもないんです」との事。ただただ、女性の髪型を眺めてはにやにやしたいらしいのだ。

理解不能。でも彼はともかく、髪型フェチらしい。

「俺は、後ろ姿フェチだな」という先輩。

「後ろ姿を、どうしたいんですか。振り向かせたいんですか？」

「ばっか。振り向いちゃったら後ろ姿じゃねえだろ」

「じゃあ、どうすんですか」

「見てるんだよ。それで色々想像すんだ」

うーむ。後ろ姿美人というのがいるのは理解してるけど、やっぱり顔は見たいなあ、僕は。

僕個人としては、全く理解できないのですが、きっと彼等は彼等なりにグッときてにやにやしてる日々なんでしょう。

ところで僕は僕で全く理解されなかったのですが、パンプスとかから垣間見える足の指の谷間フェチだったりします。

いや、元々足フェチなんです。太ももとか足首とかじゃなくって、純然たる「足」。土踏まずが大好きだったりします。

その大好きな土踏まずに至る過程にある「足の指の谷間」が、たまらなくググっとくるのであります。

まあ、こういうのはどこまでいっても平行線ですね。理解されない。楽しいからいいけど。

恋人と別れる50の方法

別れた恋人とのその後の関係性というのは色々と微妙な部分がある。

希薄な付き合いだったならそれはそれで後腐れがないのですが（失礼）、それなりに熱心な恋人同士だった場合は別れた後がしばらく大変だったりする。

実際、大嫌いになって別れる訳じゃなくて、でも付き合うのはもう無理で。

しかも自分達の周囲にもこの別れがちょっと影響を及ぼしたりなんかして人間関係がちょっとおかしくなってきた。

そして人づてで聞こえてくる訳です。「お前の前の彼女、結構今大変そうだぜ。辛そうだよ」なんて。

知るもんか、と。

だから別れない方がよかったんだ、と。

僕じゃなきゃ無理なんだよ、と。

でも僕自身、バリバリ気になっちゃって、何気なく連絡してみて、お互い探り探り話してみる。

甘えてはいけない。だってもう恋人同士じゃないから。

でも、甘えたい。本音を言えば、抱きつきたい。

でも、もう付き合っていないのだ。

二人はもう、前とは違ってしまったのだ。

でも、ほっとけない。出来る範囲で、何か力になってあげる。

そしてその後に、ちょっと寂しくなったりする。

例えるなら、そんなような仕事をしています。今。
感覚的に、似てる。

女湯を覗く事について

高校生が集団で宿泊中の女子同級生が入る女湯を覗いて動画を撮ったそうです。 ([詳細](#))

いや、これはもう青春じゃないですか、と僕なんかは思っています。

勿論、覗かれた女子生徒側はたまったもんじゃないだろうし、女性側からすれば「ふざけんな」と言われてしまうのは承知の上ですが。

高校生男子にとって、きっとクラスメイトの女の子の裸なんてのはもう奇跡以外の何者でもない筈です。

例えば、サッカー大好き高校生男子が、ワールドカップの決勝観戦チケットと、クラスメイトの好きな女の子の裸どっちが見たいかと言われたらそれはもうクラスメイトな筈なのです。

あの時期の男の子にとって、女の子の裸は幻想そのもの。そして神の領域ですらある筈。

まあ、ちゃんとイケてる男の子なんかは高校生にもなれば彼女を作って婚前交渉をしてしまうのかもしれませんが、多くのイケテない高校生や部活馬鹿はそうもいきません。

従って、神の領域を垣間見れるのは合宿とか修学旅行なんかの「覗き」以外ありえないわけです。

それを集団でやってしまう辺りが情けないというか童貞っぽいのですが、それがまたいいじゃないですか。青春です。きっとこのニュースに、暖かい気持ちになれたおっさん達もたくさんいる筈。あの頃の甘酸っぱい幻想は、時代が変わっても変わらないのです。

まあ、動画を撮ってしまう辺りがやけに現代的というか、ちょっと冷めちゃいますが、まあ怒られるのは仕方ないとして、変に厳罰にしないで頂きたいもんです。

もう二度と果たせない夢というのが、人間誰しも持っていると思います。

僕はというと、実はこの女湯覗きがその一つでした。生粋のヘタレ高校生だった僕は、覗きに行く集団にも入れず、もじもじしていたのです。

あと年上の女子高生と付き合ってみるとか、下校の時に自転車二人乗りするとか、色々ありますが、全てもはや叶わぬ夢です。というか僕はまともに恋愛したのも大学入ってからだし。

そもそも31歳にもなって女湯覗いたら捕まりますからね、普通に。ええ。

愛の告白

愛の告白というのは、何ともいえず恥ずかしくて、そして世界中から注目されているような気分になるものです。

何でこんな事を言っているかという、今日南大沢の駅に久々に行ったのですが、何を隠そうこの駅こそ、僕が人生で初めて女の子に「好きです」と告白した場所なのでした。

高校二年生の文化祭の打ち上げでボーリングにみんなで行って、その間中ドキドキしてて、というのも、この文化祭の最中に告白するぞと決めていたからで、演劇の本番の最中に彼女の手が（中略）とか、色々とタイミングがあったのになかなか言い出せず、遂に帰りの電車になってしまって彼女が南大沢で降りたのを後から追って行って駅の改札を出た所で・・・、みたいな。

ああ懐かしい。甘酸っぱい。何か、回りに凄くたくさん人がいたのに、よくぞ言ったなあ、と。

今日行ってみたら告白をした駅改札のバスロータリーは変わらず残ってました。きっとこの10年間にも、実に色々な恋の現場を目撃してきたのでしょう、このロータリーは。

ちなみにその子にはその後ふられました。そして僕が大嫌いだった隣のクラスのチャラチャラした奴と付き合い始めてしまい、僕は何だかやるせなくなっただけでボクシングに打ち込みましたとき、というお話。

あれから何度か、僕は女の子に愛の告白をする機会に恵まれましたが、あの瞬間のキラキラした感じはいくつになっても変わりません。



今日、とある駅前広場で鯉のぼりが風に揺られているのを見た。

鯉のぼりなんて随分久々に見た気がするが、きっと僕も幼かった頃は見上げていたのだろう。

自分が小さかった頃の記憶なんて数える程しかない。

鳥取に住んでいた小学校一年生の時、好きだった女の子と手繋いで小学校から帰ってたら年上の人からかわれ、「僕からじゃない、こいつが手繋ぎたいって言うから繋いだんだ」なんて照れ隠しとはいえひどい事を言った。あの時、彼女はほんのりと微笑んでいたのを覚えている。一体どんな事を思っていたのだろうか。

結局、あれから少しして、僕は東京の小学校に転校してしまった。

彼女は、あれからどんな人生を歩んでいるのだろうか。

女の子は、いつだって僕より少し大人だった。僕より少ししっかりしていて、僕より色々な事を我慢していた。そして多分、僕より色々な事を知っていたんだと思う。

だから僕は色々な事に甘えていて、屋根より高い鯉のぼりに少年の大志を呑気に重ねる事が出来たんだと思う。

男なんて、結局偉そうな事ばかり言って実際は女の子におんぶにだっこなんだ。

そんな事を思いながら、くるりの「すけべな女の子」を聞く。

確かに、女の子は男よりも少しすけべだと思う。鯉のぼりに夢中になっていた頃は知らなかったけど。

夕暮れ時の夢魔～。

人は社内恋愛を隠す

人は、社内恋愛を隠すものだ。

今日、会社の後輩とすさんだ社食で飯を食っていた。

いきなり話は逸れるのだけど、このすさんだ食堂というのが、本当にすさんでいる。まず、地下にある。地下にあるという事はすなわち窓がない。窓がない空間というのは、予想以上に閉塞感があって、しかも年期の入ったビルで喫煙も昔は可能だったものだから、壁中が黄ばんでいる。おまけに天井も低い。

窓がなくて天井が低くて黄ばんだ空間で飯を食べるところを想像してみてほしい。そりゃあもう、場末感満載だ。

ところが僕はこのシャビーな場末感と、凄くありきたりで個性も何もない安っぽい飯が嫌いじゃない。ちよくちよく利用している。

と、いうわけで話は戻って、社食で飯を食っていた。

また話は逸れるのだけど、今日は何だか猛烈に安っぽいうどんが食いたくなったのだ。コシがあってつるつるで具沢山な本格派うどんじゃなくて、しなしなで安っぽい醤油の味がする汁に使っていて、かさかさのかき揚げが載ったような、安っぽいうどん。

そんなものを食べるのなら、そりゃ社食に行くしかないじゃないか。

ところが社食に行ってメニューを見て僕が食べたくなったのはカツ定食だった。というわけで、カツ定食ご飯大盛りを注文したのだ。人生とは、そういうものだ。

で、また話は戻って、後輩とカツ定食を食っていた。話題は、彼の彼女の話だ。

彼は、去年の夏に彼女が出来た。まあ、その話は何度か聞いていた。大学の同級生らしい。共通の友人の結婚式で再会したのだ。

しかし僕はその話を信じていなかった。そこで僕は、あまりにも唐突にこう切り出した。

「で、彼女って社内の人なの？」

可哀想に、彼は動揺のあまり「え、あ、う、いや、それはどうですかね。まあ、あのですね、秘密ですけど、でも、あの、そのうち話しますけど」。

という、実に分かりやすいゴマカシを披露してくれたのだった。

「社内なんだな」

僕は追求の手を緩めない。東京地検特捜部並みだ。

「絶対言わないでくださいね」

と、いうわけで、割とあっさり認めた。

人というのは、社内恋愛というものを凄く隠したがるものだ。でも、社会人になって彼氏彼女が出来たという話を聞くと、半分以上の確率で社内恋愛だったりする。

オフィスラブ。

何だか甘美な響きで、人はそれに憧れる。でも、当の本人は隠したがる。だからその妄想が生まれ、ロマンが生まれる。

僕は日本を代表する大企業の巨大なビルに入る度に、「ああ、今日もこの敷地内でたくさんのオフィスラブが遂行してるのだなあ」と思う。大企業だろうがなんだろうが、オフィスラブはオフィスラブだ。

そしてみんな、オフィスラブを隠そうとするのだ。

ヤミ献金か偽装疑惑の証拠を隠すように。

大企業であればある程、ヤミ献金と偽装疑惑とオフィスラブが横行しているに違いないのだ。

そしてそれはきっと、東京地検特捜部に発見されてしまうのだ。

好きだった人に会った

昔、好きだった人にこないだ偶然会いました。

いやはや、偶然というのは恐ろしいもので、道すがらにばったり会うって、あるんですよ。

つい先日も、博多空港で大学時代の友人とバッタリ会ったし、学生時代にバックパッカーをしていた時にロンドンのど真ん中で大学の友人にバッタリ会った事もあります。

ロンドンで一緒に飯食った日本人のおっさんとその1ヶ月後にスコットランドのエジンバラで偶然バッタリ会ったりした事もあります。

僕達の日常には、予想以上に「バッタリ」が満載なのです。

ちなみに、今回バッタリ会った方とは、数年前に新宿でもバッタリ会った事があります。バッタリしまくりですね。

この方は、大学時代の1つ上の先輩で、話が長くなるので大分割愛しますと、まあ僕の人生に多大なる影響を与えた方な訳であります。

一重に尊敬していましたが、同時に恋をしていました。そしてまた、僕に厳しい現実を突きつけた方でもあります。

まあつまり、結局ふられたって事なんですけど。

でも途中で色々あって（本当に色々ありました）、彼女に出会った2001年の夏からその半年で、僕は随分と色んな事を学んだ気がします。

当時は僕は京都に住んでいて、まだ22歳でした。そりゃ色々学ぶ年頃です。

それから9年が経ち、東京で再会しました。彼女はご結婚されてました。

いや、これは往年のスタジオジブリの名作「海が聞こえる」みたいじゃないですか。

本当に不思議なものなのですが、当時あれだけ恋いこがれていた人ではありますが、今となっては再会してもそういう気持ちはまるで出てこないのです。外見もさほど変わっておらず、同一人物な筈なのですが、恋心は湧き出てこない。

その事実は、僕には軽いショックでもありましたが、同時に清々しさも感じました。

人と人との繋がりや思いは、何かの拍子でプツリと切れてしまうのです。それは、些細な出来事かもしれないし、或いは時間かもしれない。空間的距離感もあるだろうし死別もあるかもしれない。

とにかく、僕らは出会って別れての繰り返しな訳です。

ポールサイモンは昔、「ハローとグッバイ。人生はそれだけ」と歌いましたが、まさにその通りだと思います。

ひょっとすると切れてしまう繋がりを、僕は何とか繋いでいたいと思っています。なぜならそれは、切れてしまう事を知っているから。

放っとしても繋がり続ける縁なんてありません。いつかは、グッバイなのです。

そう、思っていたのだけど。

一回切れたと思っていた人との「バツタリ」もあるわけで、人生は何がなんだかももう分からぬのであります。

夏について



梅雨が始まり、じめじめじめと蒸し暑い季節がやってきた。そして梅雨が開けると今度はまた暑い夏がやってくる。

何故だか知らないけれども、夏になると僕は大学時代を思い出す。

いや、正確にいうと、大学時代に過ごしていた京都を思い出す。

ちなみに、上の写真は大学のキャンパスの夕焼けを撮ったものだが、夏に撮ったものではないので、この話とは関係ない。

京都で過ごした4年間で、夏というのは決まって好きな人が出来た時だった。何故だか分からないけれども、必ず夏だった。

大学1回生の夏と、3回生の夏と、4回生の夏だ。

ちなみに、大学1回生の夏の恋と、4回生の夏の恋は成就した。

まあ当たり前だが、恋をすると人生が盛り上がる訳で、そういう意味で夏が来ると人生が盛り上がっていた京都時代の夏を思い出すのかもしれない。

ただ思い出すのは、好きな人と一緒にいた夏ではなく、決まって一人で過ごした下宿の部屋の事だ。暑さにだれながら、一人でグダグダと過ごしていた時のあの感じだ。

6畳の畳の部屋は、僕の王国だった。男の一人暮らしだから、多分衛生的にはよろしくなかったんだろうけど、好きなもので溢れていて、最高に落ち着く空間だった。

僕の部屋を訪れた何人かの方々は、座右の銘を紙にたしなめて、僕の部屋の壁に貼っていった。だから、大学を卒業する頃には僕の部屋には結構な数の座右の銘が貼付けられていた。

それらの言葉が、僕の人生に幾らか影響を与えたかどうかは分からない。ただ、自堕落で夢見がちでモラトリアムに満ち満ちた典型的な文系男子の僕にとって、それらの座右の銘はちょっとしたお洒落だった。何となく、変わった感じだったからだ。そんな事位で、ささやかとはいえ自己満足できてしまう位、僕は浅はかだった。

まさか数年後に自分が営業をやっていて、大企業を前にプレゼンをして、はたまた課長となっているだなんて想像できなかった。そして今の自分が、あの頃の自分の延長線上にあるという事は今考えても信じられない。

ただ、人は続いていく。あの畳の部屋と、今住んでいる3LDKの部屋は、きっと繋がっている。そしてあの頃の夏と、今過ごしている夏も、きっと繋がっているのだろう。

僕は徐々に、あの頃の下宿を見たいと強く思う。一体今、どんな人が住んでいるのか。あるいは、あの下宿はまだあるのか。

下宿近くの美味しいパン屋はまだあるのか。あまりにもボロボロだったコインランドリーの洗濯機はまだ動いているのか。

きっと、余計なお世話なんだろう。僕なんか気がしなくたって、世界はちゃんと続いて、動いて、回っているのだ。

特に何か言いたい事があるわけじゃないのだけれど、とにかく僕は、夏になるとあのけだるい京都での夏を思い出すのだ。

みんなが結婚してゆく



先週、今週と、友人の結婚式が相次いだ。

結婚式というのは何だかんだでいいもので、随分前から会っていない人に会えたり友人の別の顔が見れたり、美味しい食べ物やケーキが食べれたりと、個人的にはとても好きな行事だ。

しかし、結婚式にはどこか寂しさが伴う。

とか言いながら、友人間で最初に結婚したのは実は僕だったりするのだが。

何故、結婚式は寂しいのか。

何ていうか、友人の別の顔が見れてしまうからのような気がする。

僕の場合、結婚したのが大学時代の友人ばかりだからか、必然的にこの数年の断絶をまざまざと見せ付けられた気がするのだ。

そりゃ学生から社会人になっているのだ。変わらない方がおかしいってものだ。

しかし僕が知っている彼等彼女等は、学生時代のままなのだ。

結婚式会場に行って最初に見る彼等彼女等の顔は、僕に懐かしさを呼び起こす。しかし、その後に展開されるのは僕とは共に過ごしていない時間を経た彼等彼女等なのだ。

懐かしさとともに、僕が彼等彼女等の中で、既に過去の人の文脈に収められてしまっている気がする。

それが、どうしようもなく、悲しい。

考えすぎなのかもしれないけど、とにかく、そんな事を思ってしまった。

背中側で着替える少女

僕が高校二年生の時だったと、思う。

学校でソフトボール大会というのがあった。戯れるわけだ。玉とバットで。

で、僕は結構な弱小チームに入った。男は確か僕ともう一人位しかいなかったのじゃないかと思う（僕のクラスは男が少なかったのだ）。

で、あまりにも弱いからみんなちょっと頑張っって練習してみよーぜという事になり、朝練なんてやってみる事になったのだ。どこにでもある、高校生の青臭い中途半端な一こまだ。

その日、僕が朝早く登校してクラスに入るとどうも一番だったらしく、教室はもぬけの空だった。僕は手早くジャージに着替えて誰か来るのを待っていた。

すると、何故か地味だが意外にかわいいチームメイトの女の子が来た。あまり話した事はないが、実はちょっと気になっていた子だ。

多少どもりながら会話をちよろちよろする。白々しい空気がした。相手も緊張しているようだった。季節は夏の少し前だったから、夏服の制服を着ていて、僕は彼女のほんのりとした胸の膨らみを少し見たのを覚えている。チェックのスカートからはみ出した、日本の足の膝小僧を見ながら会話をしていたのを、覚えている。

するとその子が、とんでもない事を言い出した。

「あたし、ジャージに着替えていい？」

「え、ここで？」

「うん」

「じゃ、じゃあ僕、しばらく出てるよ」

「ううん、いいよ、後ろ向いててくれれば」

「…」

と、いうわけで僕はしばらく後ろを向いていて、背中側でその女の子のブラウスのボタンを外す音とか、シャツを脱ぐ音とかを息も絶え絶えで聞いていた。

あの時は律儀に本当に見なかったけど、ちょっと振り返ればその子の着替えている所がすぐそこにあった訳だ。当時はまだ僕は女の子の裸なんか見た事なかったから、凄く、凄く興奮した。

そしてあの「スルスル」という音以外聞こえなかった春先の教室のあの空気だけは、未だに忘れる事が出来ない。

あの子は今どこで何をやっているのだろう。高校卒業後に友達の葬式で泣いている所を見て以来、さっぱり見なくなってしまった。

あるいは僕があの時振り向いていたら、あの子はどんな顔をしたのだろうか。

全ては勿論分からない。